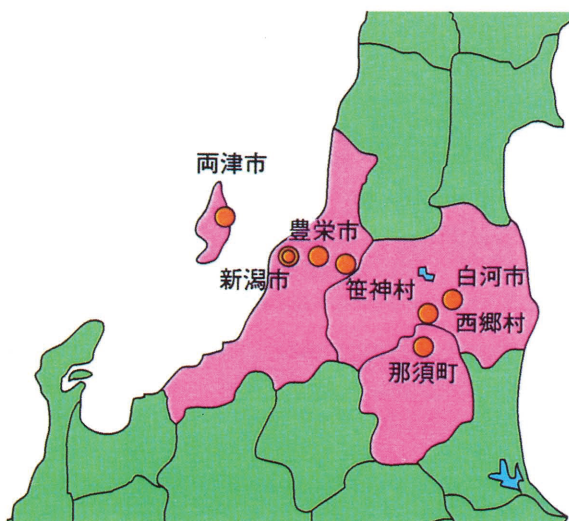


1998年8月の豪雨災害調査

昨年の春から夏にかけての天候は世界中で不安定で、バングラデシュ、中国、韓国などで大きな洪水災害が発生しました。日本でも長雨が続き、気象庁では梅雨明けが特定できないという異例の発表が行われたほどでした。

そうした中、8月初旬には新潟地方で、また8月下旬には台風4、5号による影響で北栃木・南福島地方を中心に各地で集中豪雨による災害が発生しました。

私たちの研究所では、これらの豪雨災害に対し、いち早く専門の研究者を現地に派遣し、被害状況等について調査を行いました。



新潟地方の豪雨災害

8月3日から4日にかけて新潟地方は、1日の最大雨量265.5mm、1時間当たり最大雨量97mm(新潟地方気象台)という記録的な集中豪雨に見舞われました。このため、新潟県内の笹神村、新潟市、豊栄市、両津市(佐渡)などを中心に洪水、土砂崩れが起こり、死者1名、家屋の全半壊34棟、床下・床上浸水15,071棟、水田畑地の冠水・浸水10,514haの被害が発生しました。

豪雨域が狭く、短時間に集中したため信濃川や阿賀野川などの大河川の氾濫による被害は発生しませんでした。中小河川の堤防破壊による氾濫、内水氾濫が目立ちました。

水害は主に新潟平野と佐渡の国中平野で多く発生し、中でも、新潟市を中心とする都市部での内水による家屋への浸水被害と、豊栄市(福島潟)や笹神村を中心とする水田地域での冠水による農作物への大きな被害が注目されました。特に新潟市内では一時、都市機能がマヒするなど典型的な都市水害の様相を示しました。これらの地域はゼロメートル地帯にあるため、従来からポンプなどによる排水施設は比較的整備されていましたが、記録的な豪雨のため処理しきれず被害が大きくなりました。

大きな浸水被害を出した福島潟周辺は水害常襲地帯であるため、普段から



福島潟干拓地（右側）へ流れ込む越流水（8月4日15時頃、湛水は6日間続きました。豊栄市提供）

住民の洪水に対する水防意識は高く、
当時も円滑な水防活動が行われました。

佐渡地方では浸水被害に加え、崖崩れ、土石流も発生しました。東立島地区では土石流により家屋12棟が土砂に埋まるなどの被害が発生したものの、区長が雨の異常さや土石流の前兆現象を察知して、早めに住民を自主避難させたため、死者は1名も出ませんでした。



土石流により埋まった両津市東立島地区（新潟県提供）

北栃木・南福島の豪雨災害

8月26日から31日にかけて、栃木県北部から福島県南部を中心に総雨量1,254mm、1時間当たり最大雨量90mm（那須町）という記録的な豪雨が降り、各地で河川の氾濫、山崩れなどによる災害が発生しました。この豪雨は停滞していた梅雨前線が台風4号の北上に伴い刺激されて大雨をもたらしたものです。栃木県内の被害は死者5名、行方不明2名、床上・床下浸水約3,000棟、また、福島県では死者11名、家屋の全半壊80棟、床上・床下浸水3,753棟の被害が発生しました。

栃木県北部では那珂川上流の余笹川沿いの那須町、黒磯町、黒羽町で河川の氾濫や洪水流による橋や家屋の流失による被害が出たほか、鉄道や国道4号、東北自動車道などで交通が遮断されました。余笹川沿いの低平地では、主に河流の勢いが激しくあたる河川の屈曲部の堤防が破壊され、流れ込んだ洪水流により家屋が破壊・流失しました。福島県内の阿武隈川沿いでは、白川市内で堀川との合流点等で堤防が破壊され、

大きな洪水などにより、各地で浸水被害が多発しました。

土砂被害は主に福島県南部の西郷村、大信村を中心に発生しました。8月27日早朝には、西郷村真船にある県の救護施設「からまつ荘」の裏山で発生した崩壊土砂が土石流化して流れ込んだため、施設の住人5名が亡くなりました。このほか、西郷村真船で2名、大

信村隅戸で1名、岩代町で1名が山崩れにより亡くなっています。

なお、この調査の詳細結果については、今後の防災対策などに活かすため、防災科学技術研究所の主要災害調査報告書として取りまとめ、公表する予定です。

(問い合わせ先：気象防災研究室)



洪水流により建物の半分が流失した家屋（栃木県那須町砂の目地区、那珂川支流余笹川）



福島県大信村隅戸地区の表層崩壊（死者1名）